

第 23 話：青魚缶詰における魚種間の連携

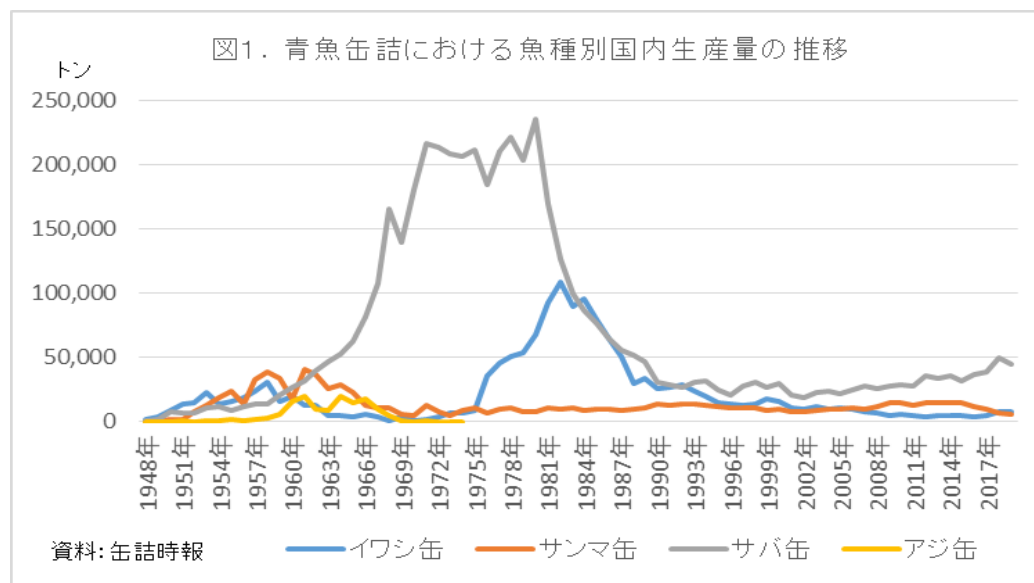
日本水産缶詰輸出水産業組合・日本水産缶詰工業協同組合
専務理事 松浦 勉

「サバ缶詰を食べよう」シリーズでは、第 1 話が「テレビ番組によりサバ缶詰人気上昇」、第 2 話が「消費拡大に伴うサバ缶詰の新商品開発」、第 3 話が「中央水産研究所のサバ缶マニア」、第 4 話が「サバ缶詰を使ったご当地料理」、第 5 話が「レシピ本にみるサバ缶詰料理」、第 6 話が「サバ缶レシピ本の出版動向」、第 7 話が「レシピ本とテレビ番組がきっかけを作ったサバ缶ブーム」、第 8 話が「統計資料からサバ缶ブームをみる」、第 9 話が「サバ缶ブーム下における青魚 3 魚種缶詰の販売金額の動向」、第 10 話が「サバ缶の調理方法別消費動向」、第 11 話が「サバ缶ブーム期におけるサバ缶の輸入を含む供給動向」、第 12 話が「マグロ缶ブームとサバ缶ブームの比較」、第 13 話が「小売店舗におけるサバ缶の販売状況」、第 14 話が「ポルトガルの水産缶詰事情」、第 15 話が「八戸市で開催された鯖サミット」、第 16 話が「水産高校とサバ缶詰」、第 17 話が「戦後における水産缶詰の生産量と輸出量の概要」、第 18 話が「戦後の我が国における主要水産缶詰の輸出量動向」、第 19 話が「戦後の日本人における水産缶詰の嗜好の変化」、第 20 話が「サバ缶の調理形態別国内消費量の動向」、第 21 話が「イワシ缶の調理形態別国内消費量の動向」、第 22 話が「サンマ缶の調理形態別国内消費量の動向」についてお話させていただきました。第 23 話は、「青魚缶詰における魚種間の連携」についてです。

戦前の青魚缶詰は、主にイワシ缶しか生産されていませんでした。しかし、戦後になると、イワシ缶に加えて、アジ缶、サンマ缶、サバ缶も生産されるようになりました。サバ、イワシ、サンマ、アジは、背が青いので青魚と総称されます。マイワシ資源がダイナミックに変動することは良く知られていますが、青魚資源はいずれも大きく変動します。しかし、ある魚種が減少すると別の魚種が増加するなどの魚種交替がみられ、青魚缶詰の生産量は、これまである程度安定的に推移してきました。

図 1 に、「青魚缶詰における魚種別国内生産量の推移」を示しました。戦後の青魚缶詰の大量生産は、長崎県から始まったようです。長崎県では、1947 年から 1953 年にかけて、マイワシが大量に漁獲され、イワシトマト漬缶が輸出向けに大量生産されました。しかし、1954 年からマイワシが不漁になると、長崎県ではアジが漁獲されるようになりました。当時のアジは価格が高いため、缶詰の生産はほとんど行われませんでした。ところが、長崎市のある缶詰会社が、イワシトマト漬缶の代替品として、アジトマト漬缶を初めて製造して輸出を試みました。そして、フィリピンなどで好評を博して輸出が本格化したため、アジ缶の生産量が拡大しました。

また、鳥取県境港市では、1952年頃からイワシトマト漬缶を生産しましたが、1962年頃からマイワシの漁獲が減り始めました。それに先立つ1959年頃からアジの水揚げが増えたため、境港市の缶詰会社はイワシ缶からアジ缶に転換しました。しかし今度は、アジの水揚げが1963年・1964年から減り始めました。同じ頃、サバが全国的に大量に漁獲されるようになったため、境港市では、長崎市と同様、アジ缶からサバ缶に転換しました。



一方、千葉県銚子市では、1946年に太平洋沿岸のマイワシ漁獲量が減少する中で、1949年にイワシ缶の代替として、サンマ缶を試験的に輸出したところ、好評を博しました。このため、1952年からサンマ缶を大量に輸出するようになりました。

全国の青魚缶詰生産は、1958年までイワシ缶とサンマ缶が主体でしたが、1961年にはイワシ缶が減って、サンマ缶が一番多くなり、また、アジ缶とサバ缶も増加しました。その後、1965年になるとサンマ缶、1967年にはアジ缶の生産量が減少し、この間にサバ缶だけ輸出が増えて生産量が増加しました。

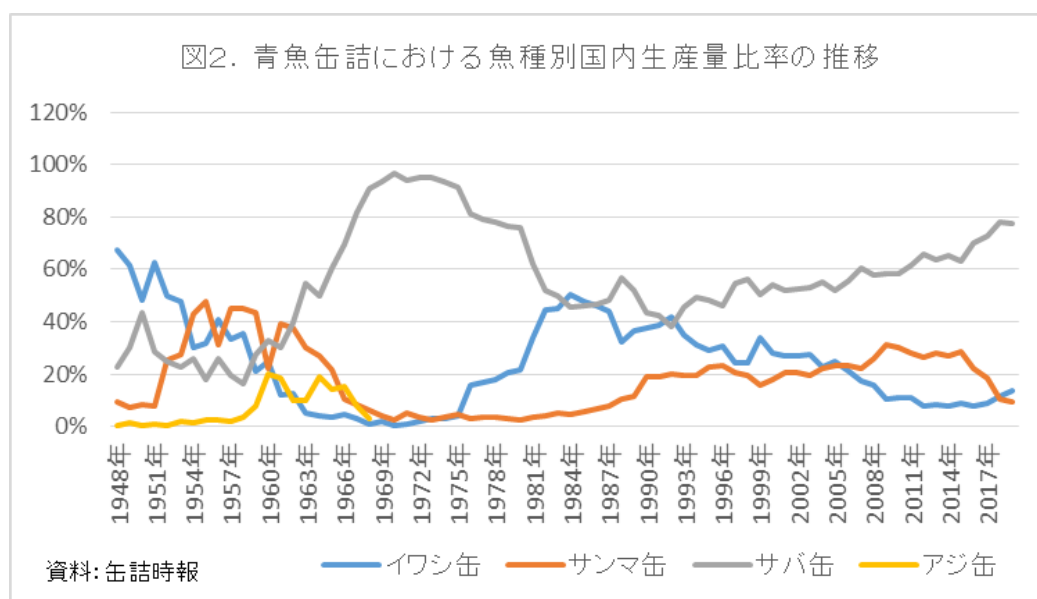
次に、図2に、「青魚缶詰における魚種別国内生産量比率の推移」を示しました。国内生産量比率とは、青魚缶詰全体に占める魚種別生産量の比率です。以下に、1950年代から2010年代までの時系列的変化について述べます。なお、1950年代と1960年代は、青魚缶詰の魚種別生産量が大きく変動したので、5年ごとに述べます。

1. 1950年代

1950年の青魚缶詰の国内生産量（以下、「生産量」）は、イワシ缶（8,343トン）、サバ缶

(7,511 トン)、サンマ缶 (1,428 トン)、アジ缶 (82 トン) の順であり、イワシ缶が一番多かったです。また、1955 年には、すべての青魚缶詰生産量が増加し、サンマ缶 (23,834 トン)、イワシ缶 (16,042 トン)、サバ缶 (9,054 トン)、アジ缶 (1,262 トン) の順となり、サンマ缶が一番多くなりました。

イワシ缶は、1950 年・1951 年頃から輸出量が多くなり、1953 年までは青魚缶詰の中で国内生産量比率が一番高かったです。しかし、イワシ缶が不足すると、その代替として 1952 年からサンマ缶の輸出が始まり、1954 年~1959 年には、サンマ缶の同比率が一番高い年が多くなりました。



2. 1960 年代

1960 年の生産量は、サバ缶 (26,353 トン)、イワシ缶 (20,056 トン)、サンマ缶 (17,932 トン)、アジ缶 (15,928 トン) の順であり、サバ缶の生産量が一番多くなりましたが、いずれの魚種の缶詰生産量も 1 万トンを上回りました。

しかし、1965 年には、サバ缶 (62,722 トン)、サンマ缶 (22,675 トン)、アジ缶 (14,736 トン)、イワシ缶 (3,943 トン) の順となり、イワシ缶が 1 万トンを下回りました。

1958 年まではイワシ缶とサンマ缶の国内生産量比率がサバ缶やアジ缶よりも高かったですが、1959 年以降イワシ缶の同比率が低下し、サバ缶の同比率が高くなりました。

アジ缶は、イワシ缶、サンマ缶の不振をぬって大幅に増加し、1960 年になって初めて 1 万トンを超える生産を行い、1966 年も 1 万トン以上生産しましたが、1967 年以降生産量が激減しました。アジ缶は、1968 年には、山陰地区 (鳥取県、島根県) だけで生産されていましたが、アジ漁獲量の減少により価格が高騰し、輸出価格に見合う価格での原料入手が困難になりました。この当時、山陰地区では、アジよりも安価なサバの豊漁が続くアジ缶からサバ缶に転換したことから、1969 年以降アジ缶はほとんど生産されなくなりました。

3. 1970年代

1970年の生産量は、サバ缶（180,540トン）、サンマ缶（5,071トン）、イワシ缶（1,019トン）の順でした。

サバ缶輸出量は、他の青魚缶詰に比べて圧倒的に多くなり、国内生産量比率は、1967年～1976年の10年間80%～90%で推移しました。また、イワシ缶はマイワシの好漁により、同比率が1975年の4%から1976年には16%に上昇しました。

青魚缶詰は、1970年代当初まで価格が安く、過当競争の激化と製品イメージの低さから、相場が絶えず不安定でした。しかし、1973年以降海外市場の引き合いが活発化すると相場が強気に転じ、輸出の高値更新を国内販売価格が追いかけるという「輸出主導型」の価格形成が強まりました。

4. 1980年代

1980年の生産量は、サバ缶（235,932トン）、イワシ缶（67,575トン）、サンマ缶（7,306トン）の順でした。

青魚缶詰の生産量は、輸出の拡大によって増加し、1980年には輸出量がピークになりました。しかしその後、1983年の重要輸出先国の輸入停止や、1985年の大幅な円高を契機に、日本産水産缶詰が第三国の缶詰よりも価格が高くなり、輸出が減少しました。

一方、1983年には、マイワシが健康食品として見直される「イワシブーム」が起こりました。このため、イワシ缶の国内生産量比率が1984年には50%に上昇しました。しかし、イワシブームは長くは続かず、その後イワシ缶の同比率が減少しました。しかし、イワシブームは、青魚缶詰が栄養面、健康面で関心がもたれるきっかけになりました。

5. 1990年代

1990年の生産量は、サバ缶（30,412トン）、イワシ缶（26,147トン）、サンマ缶（13,286トン）の順でした。

サバとイワシの原料事情が悪化して、需要をまかなう缶詰生産ができなかったため、サンマ缶に対する代替需要が起こりました。サンマ缶は、1970年から1991年まで輸出されませんでした。1993年～1998年に数100トンが輸出されました。また、サンマ缶は、1990年代以降値頃感のある水産缶詰として、国内で大量に消費されました。このため、サンマ缶の国内生産量比率は、1989年から1998年までの10年間、20%台で推移しました。

6. 2000年代

2000年の生産量は、サバ缶（29,845トン）、イワシ缶（15,416トン）、サンマ缶（9,886トン）の順でした。

イワシ缶とサバ缶は、2000年になると、原料事情が悪化し生産コストが上昇したため、

国内販売では、1個100円売りの特売にかけられる機会が少なくなりました。このため、量販店ではイワシ缶やサバ缶に代わって、サンマ缶を特売にしようとする動きが強くなりました。その結果、サンマの国内生産量比率は、2004年～2009年には20%～30%台で推移しました。

7. 2010年代

2010年の生産量は、サバ缶（28,235トン）、サンマ缶（14,637トン）、イワシ缶（5,355トン）の順でした。

サンマ缶は、2010年～2015年には、国内生産量比率が26%～28%で推移しました。しかし、2016年以降、原料事情の悪化により、サンマ缶の価格が上昇したため、2019年の同比率が9%に低下しました。

一方、2017年からのサバ缶ブームにより、サバ缶の国内消費量が増加したため、サバ缶の同比率は2016年の70%から2019年には77%に上昇しました。また、このブームによって、イワシ缶の国内消費量も増加したため、イワシ缶の同比率は2016年の8%から2019年には14%に上昇しました。

青魚缶詰は、戦後1960年代まではアジを含む4魚種、1970年代以降サバ、イワシ、サンマの3魚種により構成され、それぞれの魚種缶詰がうまく連携しながら生産されてきました。

しかし、最近、北太平洋公海における外国漁船によるサンマ過剰漁獲により、サンマ缶の生産量が激減しています。2015年9月の国連サミットにおいて、SDGs（持続可能な開発目標）の17の大目標の1つ「海の豊かさを守ろう」の理念の実践が必要です。今後、北太平洋公海におけるサンマの資源管理を強化して、サンマ資源の早急な回復が急務となります。